18. ymä……

19. mani burγa〔n〕……
　　摩尼　佛(神)

A、(1)、tiräk oγšaγu は缺佚した前行から續いたものゝ殘りであることは言ふまでもない。tirk といふ語はなほAの1、2、3、とBの5、6、にも見えて居る。語義は「支柱」[2]で唐代の書に「諦略」[3]と書かれてあるのはこの語の對音である。

oγšaγu は〔似たる〕〔像れる〕の義で、人名として用ゐられたものに外ならぬ。

qamllγ 卽ち「Qamul 又は Qamil の人」に就いては後に詳述する。

küdägümüz はA15にも見え、又 küdägü はA6及び8にも見える。但しA6では語の末を殘缺して居るが、必ずかく讀まるべきことと疑無い。 küdägü は「婿」、從つて küdägümüz は「我等の婿」で、從來發表された文書中に屢々現れてゐる。[4] 漢語で駙馬某といふのと同樣に用ゐられたものと考へる。

(2)、oγul は「子」の義であるが、屢稱號中に用ゐられてあることは善く知られて居る通りである。[5]

Inanč は唐代に普通伊難珠(伊難主 伊難朱)と寫された語に當り、「信」、「信ずる人」の義である。これも吐魯番出土のトルコ文書やオルホン碑文に屢見する名で、曾て Pelliot[6] 氏は唐代に「親信官」と譯したのはこの語に當ると思はれると述べた。

käntč も吐魯番[7]文書に käntč tängrim として用ゐられてゐる。Radloff[8] 氏はこれを Schatz(?) と解いたが、思ふ